



ショートボブの美
女



革命

春日信彦

カウンセリング

安部医科大学付属病院東病棟515号に入院している拓也は東向きの窓から眼下に見える小富士公園をぼんやり眺めていた。この公園は患者のリハビリ施設を兼ねて病院建設と同じくして作られた。この公園を取り囲むように植えられた111本の桜の木には満開の桜が咲きほこっていた。桜の木の下ではカラフルなシートに陣取った花見を楽しむ患者とその家族たちで賑わっていた。

拓也のうつ病は病理学上深刻なものではなかったが、生命の有限について考えたくて拓也自ら入院を希望した。ドクターは拓也という貴重なモルモットを有効に使うために入院を快諾した。と言うのも、早速、先月クイーンズ社から一年契約でリースしたロボ看護師キャサリンを使用したからだ。このキャサリンは精神病患者のために開発されたロボカウンセラーで凶暴な患者にも対応できるものであった。

桂コーポレーションの傘下にあるクイーンズ社のダラス研究所で開発されたキャサリンは一見すると美人看護師に見えるが、精神病治療に必要な情報がプログラムされており、日本語を聞き取り話すことができた。アメリカでは精神病対応のロボ看護師の開発が急ピッチで進められていた。と言うのも、三人に一人は何らかの精神病と診断され、特に、知識人の精神病患者が急増していた。一流大学を卒業し一流企業で働くエリートたちの自殺が急増し、さらに、快楽殺人の犯罪件数も急増し始めていた。

キャサリンには拓也の経歴、性格、知識、身体に関するデータがすでに入力され、もっとも治療に有効なプログラムが作成されていた。キャサリンは拓也からの日本語音声を取り取ると、即座に最善のプログラムを応用作成し、日本語音声で拓也に発信する。どんなにたわいもない世間話でもそれに対する回答は、拓也の精神治療に最善なものとして作成され、発信されていた。

拓也は心の奥底に眠っている悩みを見つけてはキャサリンに問いかけていた。キャサリンは10時に拓也の部屋にやってくる。「おはようございます。気分はいかがですか？」拓也への朝の挨拶はいつも決まっていた。もし、希望すればプログラムの変更は自由にできるが、治療に有効とみなされない変更は却下される。「はい、気分は爽快です。キャサリンはいつもお美しいですね。今日もよろしくお願いします」拓也もいつものように判を押したような挨拶をした。

窓際に立っていた拓也は大きく深呼吸するとブルーのテーブルの椅子に腰掛けた。「キャサリン、今、窓から公園の桜を見ていたんだ。とってもきれいだね。人工の桜もきれいだけど、散りゆく本物の桜は哀愁があって僕は好きだよ。キャサリンはどう思うかい？」拓也は科学がもたらす美を歓迎しているが、本心は消滅する運命にある本物の美が好きであった。「桜は大好きです。どんなに人工的な美を創造しても本物の美のほうがはるかにすばらしいと思います」キャサリンは拓也の心をコントロールし始めていた。

拓也は少し気まずそうな表情でキャサリンの横顔を見つめた。「そう、ちょっと困ったことがおきているんだよ。男からするとばかげているんだがね、それと言うのは、アンナがやきもちを焼いているんだ。君に」拓也は笑顔を作って目じりを下げた。キャサリンも笑顔を作るとソフトできれいな声で話し始めた。「あら、キャサリンにですか？ロボに嫉妬ですか？このことは貴重なデータですね。早速、記憶ファイルに書き込みを行っておきます」拓也の音声はJava/Eclipseαに書き換えられ記憶された。

拓也は頭をかきながら話を続けた。「アンナが嫉妬するとはびっくりしたよ。アンナは飛びっきりの美人だろ。アンナと張り合えるほどの美人はそこらにはいないんだけど、キャサリンはアンナに勝るとも劣らない美人だろ、だから、やきもちを焼いていると思うんだな。最近、機嫌が悪くて難儀しているよ」拓也は立ち上がると豆を自動的に挽きドリップするコーヒーメーカーに向かった。ミッキーのコーヒーカップにコーヒーを注ぐと席に戻った。

キャサリンは少し困った表情を作ると青い眼で拓也を見つめた。「確かに、ロボ看護師は美人です。特に、カウンセラーは美人度が高いんです。と言うのも、美人のカウンセラーのほうが、治療効果が高くなるという実験結果が出ているわけです。それは男性患者用のカウンセラーの容姿の話ですが、女性患者用のカウンセラーは、美人度が低く設定されています。やはり、女性は美人に対して嫉妬しますからね」ロボの容姿の設計についてわかりやすく説明した。

拓也はあきれた顔をするとコーヒーを一口すすった。「ロボの顔も声も人間以上に美しくなると人間の女性は肩身が狭くなりますね。こうなってくると、人間の存在価値まで危うくなってしまいますよ」拓也は人間以上の役割を果たすロボに感謝していたが、人間の仕事を奪っていくロボを疎ましく思っていた。キャサリンは青い目を大きく見開くと心地よい声で話し始めた。

「投資家は有限的知能の人間に多額のお金を投資して英才教育するより、無限の可能性を秘めたロボの開発に資金を投資したほうが効果的だと言っていますが、まったく、それは一面的な見方だと思います。人間はロボには決してまねできない創造という神様からの贈り物を持っています。確かに、今ではロボも高度な応用力を持つようにはなってきましたが、人間の創造力には及びません。どんなに科学が進歩しても、ロボが人間より優位に立つということはないでしょう」

キャサリンはロボの優位性を認めていたが、創造力がロボに勝る唯一の人間の武器であることを叫んだ。だが、一部の国際金融投資家たちが、人間不要説を唱えていることも事実であった。すでに、彼らは世界人口削減のために秘かに不妊政策を推し進めていた。もはや、ロボの使用により多方面において人間から労働が奪われ、多くの労働者が失業し、生活保護に頼る人々が各国で急増していた。このことは国連でも深刻な社会問題として取り上げられていた。

拓也はコーヒーをすすりながら人工授精の成功のことを話すタイミングを見計らっていた。喜ばしいことであるから躊躇することではなかったが、なんとなく恥ずかしい思いがあった。「キャサリン、とってもうれしいことがあったんだ。三回目で成功したんだ。人工授精に！ほっとしたよ。これで肩の荷が下りた思いだ。アンナは有頂天になって喜んでいるよ。これで、いつ死んでも、思い残すことはない。本当に、神と医学に感謝しているよ」

拓也は自分の有意義な死を考えていた。

拓也のほっとした顔に応えるように話し始めた。「それは、それは、おめでたいことですわ。拓也さん、本当におめでとうございます！アンナさんも、待ちに待った待望の子供を授かり、お祝い申し上げます。拓也さん、いつ死んでもいいなんて、そんなことおっしゃるものではありませんよ。アンナさんが聞いたら悲しまれますよ。子供の誕生は神からのプレゼントです。これを機にいつそう長生きされなくてはバチが当たりますよ」キャサリンは女の気持ちを援護する発言をした。

拓也は人工受精が成功したことの喜びより、死への覚悟が固まったことへの喜びが大きかった。弁解するように心のそこでつぶやいた。子供を授かったからには親は命を賭けて育てなければならない。このことは十二分に承知している。だが、自分は人類のために死ぬことを選びたい。“命と愛”を破壊する国際金融資本家たちと戦って死にたい。思うに、人類にもガンができるのだ。このガンは戦争ビジネスを当然のごとくやってしまう。また、有害なウイルスをばら撒き多くの人を病気にし、医療ビジネスで金儲けをする。まったくたちの悪いガンが今この世界で増大している。

キャサリンは物思いに沈んでいる拓也を見て少し心配になった。うつろな目をした拓也が時々現れる。うつに陥った患者はほとんど死を考え始める。早く死んで楽になりたいと思うようになる。そのために、いろんな大義名分を考え出しては、自己満足していく。それが深刻化すると“神様が自分を呼んでいる”と言って自殺したり、最悪な場合、妄想の世界を作り出し、“正義のために悪人に天誅を下す”といって殺人を犯す場合がおきる。

拓也は次第にウツに沈み込んでいった。拓也は安楽死を考えるようになっていた。キャサリンに早く死んで天国で楽しく遊びたいなど、常軌を逸したと思われる発言をしたことがある。拓也の死への願望がウツから来ていると判断しているが、ウツは薬ですぐには治らない。カウンセラーが患者の弱りきった心をゆっくり丁寧に回復させる以外になかった。そのために、ドクターは高額のリース料を支払って、キャサリンをリースした。

ドクターにとってキャサリンの使用は貴重な実験であった。拓也というモルモットを使ったカウンセリングはドクターの研究に大きな貢献をすることになった。拓也の行動はすべて録画され、彼の発言もすべて録音される。入院している間は完全に監視されることになる。このことに関して拓也は了解し、入院した。そのため、当然治療費は無料となった。さらに、モルモットとしての日当が支払われた。

拓也の顔色の変化をすばやく読み取ったキャサリンはうつ妄想から現実に戻すためのタイミングを計って言葉をかけた。「拓也さん、また、軍国主義について考えられているんですね。拓也さんの正義は素晴らしいと思います。でも、非武装世界の実現はすぐにはできませんね。この問題は全人類が考えるべきことで、拓也さん一人が悩む問題ではないのですよ。拓也さん、決して一人で悩んではいけません、この前にも言ったでしょ」キャサリンは拓也が一人で悩む習慣を改善すべく助言を心がけていた。

欧米ではカウンセラーはなくてはならない存在になっていた。特に、超エリートたちはかかりつけの精神科医を持つようになっていた。忙しい彼らは病院に行くのではなく、高額な治療費を支払い、ドクターを自宅に訪問させカウンセリングを受けていた。彼らはハードなビジネスのストレスから来る感情の異常をコントロールできなくなっていた。子供のころから英才教育を受けエリートとして育った彼らは、自然発生的な感情までも病的なものと考えようになっていた。

さらに、欧米では精神医学において大きな問題が拡大し始めていた。悪質な営利主義の精神科医が増加し始め、非科学的ともいえる精神医学が正当化され始めた。超エリートたちは子供のころから合理主義、営利主義が正義と教えられ、感情までも合理的であり営利的なものでなければならないという強迫観念にとられるようになっていた。自然発生的な感情が営利主義によってゆがめられていたならば、ドクターがカウンセリングによって徐々に自然回帰を図らなければならないのである。ところが、悪質な営利主義のドクターはストレスにより弱りきった感情を病気であるかのように診断し、さらに、根拠のない病名まで作り上げていた。

超エリートたちのほとんどはカウンセリングを受けているが、決して彼らは病気ではない。ところが、精神科医たちは次から次へと病名を作り上げ、彼らを病人に仕立て上げているのだ。このことは医療ジャーナリストによって指摘されているが、精神を安定させ、ビジネスに適合させる精神を維持するには、超エリートたちにとって、カウンセラーは不可欠な存在になっていた。そのため、彼らは高額なカウンセリング料を支払い続けている。

拓也はうつに沈み込んでいく自分を自覚していた。“平和と共生”とは真逆の“軍国主義と資本主義”が拓也の精神を徐々に破壊していた。さらに、勃起不全と前立腺悪性腫瘍は生きる意欲を失わせていた。拓也にはこれからの夢や希望が一切現れなくなってしまっていた。妄想的悩みと苦しみの毎日を送る拓也にとって、刻一刻と過ぎ去る時間は、単なる死への時間の経過でしかなかった。早く死にたいと心のそこをつぶやく毎日を送るようになっていた。うつ病患者の特徴である自殺願望が拓也の心を占拠し始めていた。

拓也の病室は精神回復を目的として設計されているため、ほとんどホテルの一室と同等の作りになっていた。当然ではあるが、患者にとって危険なものは一切病室には置かれていない。たとえば、自殺の道具として使われる可能性がある、はさみ、ナイフ、かみそり、などは置かれていない。拓也が自ら入院を希望したのも、何度か投身自殺の衝動に駆られたからだ。全死亡者数に占める自殺による死亡者数は年々増加しており、精神医学において重要なテーマとなっていた。

キャサリンは拓也に“生きる希望”を抱かせるために、保有する情報を解析しては瞬時に組み立てていた。拓也はうつ病が進行するに連れ、前立腺悪性腫瘍の治療を拒み始めていた。前立腺悪性腫瘍に関しては、治療が遅れると死亡する確率が高くなる。拓也の心の底にある自殺願望が治療を拒否し始めていると考えられた。一刻も早く、生命欲を駆り立てる“生きる希望”を拓也の心に復活させなければ、治療拒否による自殺を幫助してしまうことになりかねない。ドクターはそのことを考え、キャサリンをリリースする決意をした。

拓也の心からは、数学も、ロボット工学も、論理学も、文学も、子育ても、友情も、愛も、徐々に消滅していった。暗黒のヘドロのような海に投げ込まれ、もがき苦しみ、おぼれつつある狂人に拓也は等しかった。合理的思考を自ら破壊し、宇宙における人類の存在意義おも否定した。戦争を肯定し、殺人を平気で行う人類の存在が生命体の法則の一つであるならば、自ら生命を絶つことも生命体の法則の一つであると拓也は結論付けるようになっていた。

見えない心

アンナのお腹にはアンナの分身が誕生していた。分身の誕生がアンナ、さやか、亜紀たちの毎日の話題となっていた。さやかとアンナは甘党茶屋を開店していたが、月曜日は定休日としていた。平原遺跡公園の桜の花見に出かけた三人は、もっとも大きな桜の木の下にミッキーのシートを敷くと朝早くに起きて作ったお弁当を広げた。そこには鮭おにぎり、明太子おにぎり、こぶおにぎり、卵焼き、出し巻き、から揚げ、ズワイガニ、車えび、など亜紀の好物が並べられた。

アンナは鮭おにぎりを大きな口で一口食べると笑顔でつぶやいた。「馬鹿な拓也、入院なんかしちゃって、今頃、何やっているのやら？」さやかもあきれた顔で相槌を打った。「まったく、何を考えているのやら、花見もせずに部屋に籠っているなんて、もったいない。いつ退院するのかしらね？」さやかは明太子おにぎりとし巻きを小皿に取り、亜紀に手渡した。笑顔で受け取った亜紀は素手で出し巻きをついかむと口に押し込んだ。

亜紀は口をもぐもぐさせながら話しはじめた。「パパって、どんな病気なの？」アンナはそ知らぬ顔をしていたが、適当に答えた。「病気じゃなくて、家出じゃない、あんなに元気だったんだから」アンナは勝手に入院した拓也にムカついていた。亜紀はきょとんとした顔で返事した。「そうなの、家出なの。亜紀のこと、嫌いなになったのかな～」亜紀の手からおにぎりがポロリと落ちた。

さやかはアンナをにらみつけると亜紀の肩に手をやった。「今言ったことは、冗談よ。パパは亜紀ちゃんのが大好きよ。いつも、お見舞いに行ったら亜紀ちゃんが元気か、聞いてくるのよ。早く退院して亜紀ちゃんと遊びたいって言っていたわ」さやかはアンナの無神経さにあきれた。亜紀は笑顔を取り戻すと訊ねた。「いつ退院するの？」さやかは少し困った顔をしたが笑顔で答えた。「きっと、あと、一週間もすれば帰ってくるんじゃない。それまで、三人で頑張らなくっちゃね」さやかは亜紀の肩をポンと叩いた。

笑顔を取り戻した亜紀は鮭おにぎりを小さな口に押し込んだ。「亜紀ちゃん、喉につかえちゃうわよ」さやかは水筒のお茶を紙コップに注ぐと亜紀に手渡した。お茶を一口飲んだ亜紀は大きな声で話した。「入学式はパパと一緒にね。ママ、よかったね」亜紀はアンナの顔をのぞいた。アンナは満面の笑みを作ると返事した。「当然よ！入学式が待ち遠しいわ。そうだ、服を新調しなくっちゃ。思いっきり、おしゃれしてやるぞ〜」アンナはガッツポーズを見せて二人を笑わせた。

拓也が入院して10日が経っていた。アンナは検査入院ということで安心していたが、日が経つにつれ不安になっていた。「そうだ、花見が終わったら、拓也の見舞いに行きましょう。ぜんざいを持っていったら跳んで喜ぶんじゃない」アンナは二人に声をかけた。「やったー、いく、いく、早く行きたい。さやかおね〜ちゃんも行きたいでしょ」亜紀は今すぐにでも行きたいそぶりをした。

さやかも笑顔を作り、大きく頷いた。「早速、ぜんざいを作らなくっちゃね。花見はお開きにして、もう、片付けようか？アンナ」さやかは亜紀の気持ちを汲んでアンナに同意を求めた。立ち上がった亜紀を見てアンナはお弁当を片付け始めた。三人は自宅に戻るとアンナとさやかはキッチンでぜんざいを作り始めた。亜紀は毎日折っていた鶴を袋に入れて、パパへのお手紙を書き始めた。

アンナはやわらかい白玉団子を入れたぜんざいをタッパーウェアに入れ、それをアルミホイルで包んだ。「準備オッケー！さあ、出発しましょう」アンナは亜紀に準備を促した。さやかは亜細亜タクシーをすでに呼んでいた。タクシーが到着すると三人は安部医科大学付属病院に向かった。3時過ぎに到着した三人は担当医に面会の承諾を得るとエレベーターで515号室に向かった。三人が515号室のドアの前に10秒ほど立っていると、ドアが静かに開いた。

亜紀が先頭に三人はそっと部屋の中に入っていった。アンナは声をかけた。「拓也、元気！」亜紀も声をかけた。「パパ、お見舞いに来たよ」さやかはきょろきょろと部屋を見渡した。拓也はベッドで横になっていた。声を聞いた拓也は元気よく答えた。「ハ～イ、元気で～す」拓也はベッドから飛び出すとドアに向かって駆けていった。アンナは元気な拓也を見てムカついた。「元気じゃない、いつまで、入院してんのよ。さっさと退院しなさい。みんな、心配しているんだから」アンナは目を吊り上げていた。

拓也は突然怒られて、しょんぼりしてしまった。さやかはアンナの気持ちを察したが、あまりにもきつい言い方に驚いてしまった。「アンナ、拓也はから元気なのよ。拓也、検査はどうだったの？何も異常なかったの？」さやかは拓也をかばうように声をかけた。「ごめん、ごめん、問題なかったよ。もっと早く退院できたんだけど、カウンセリングを受けていたんだ。明日にでも退院できるよ。心配かけたね。アンナ」拓也はアンナの気持ちを落ちつかせようと嘘をついた。

アンナは少し笑顔を見せるとテーブルに向かって歩き出した。さやか、亜紀、拓也たちもアンナの後について歩き出した。テーブルにタッパーウェアを入れた袋を置くと拓也に訊ねた。「拓也、この袋の中に何が入っているでしょう？ヒント、拓也の大好物です」アンナは笑顔で拓也の目の前に差し出した。拓也はしばらく考え、手をポンと叩き、答えた。「はい、僕的大好物ですね。それは、ぜんざい、じゃないかな？」拓也はアンナの顔をのぞいた。

亜紀の大きな声がした。「ぜんざい！あたり~~、開けて、開けて、早く~」亜紀は拓也の手を引っ張った。拓也は袋の中のアルミホイルに包まれた丸い容器を取り出し、笑顔でアルミホイルを開き始めた。タッパーウェアのふたを開けると大きな声で叫んだ。「ありがとう、今、一番食べたかったんだ。早速、いただくよ」拓也は棚からスープ用のカップを取り出し、スプーンを使ってこぼさないようにゆっくり流し込んだ。

四人はテーブルを囲み、退院の話 시작했다。「本当に、明日、退院できるのね」アンナは真剣なまなざしで訊ねた。「いや、まだ、確認は取ってないけど、明後日にはできると思うよ」拓也は一通りの検査が終わったため、とりあえず、亜紀の入学式に出席するために退院することに決めていた。「亜紀の入学式と一緒にいけるということね」アンナは念を押すように行った。拓也は大きくうなずいた。亜紀は跳び上がって叫んだ。「やった～、パパと一緒にだ！」安心した三人は主治医に挨拶すると自宅に戻った。

拓也が入学式に出席することを知り、安心した亜紀は8時半に寢床に着いた。アンナとさやかも、拓也が重大な病気ではないことがわかり、一安心していた。キッチンのテーブルで向かいあって座っていた二人は、りんごを食べながら亜紀を起こさないように小さな声で話していた。「元気な赤ちゃんが生まれるといいね」さやかはアンナのお腹で育っている妊娠1ヶ月の分身の未来のことを考えていた。

アンナは亜紀の入学式に着ていく服のことを考えていたが、突然、亜紀が言った信じられない言葉が心によみがえってきた。「さやか、そう、この前、戦闘機の特番をやっていたのよ、う～ん、そう、ステルス戦闘機だったかな、それを見てね、亜紀ったら、戦闘機のパイロットになりたいって言ったのよ。これってどう思う。びっくりしちゃった」アンナは目をクリクリさせて上ずった声で話した。

ステルスと聞いて興味深く聞いていたさやかは笑顔で答えた。「すごいじゃない、将来、亜紀が本当に戦闘機のパイロットになりたいって言ったなら、防衛大学に行かせたらいいじゃない。国防軍の空軍に入れば戦闘機のパイロットになれるんじゃないの。亜紀は頭がよくて、運動神経もいいから、きっとパイロットになれるんじゃない」さやかはアンナの言葉を真に受けてとんでもない妄想を話した。

アンナはあきれた顔で話しはじめた。「何言ってるのよ、亜紀は女よ、軍人になんかにはさせたくないわ。アメリカでは女の軍人が多いみたいだけど、ここは日本よ。軍国主義はアメリカと北朝鮮だけで十分よ。アンナは軍国主義には断固反対よ。亜紀が国防軍に入りたいといっても、断固反対するからね、さやかも反対してよ。女は絶対に戦争になんかには行ってはいけないのよ。女の務めは人殺しではなくて、子供を育てることなのよ、さやかも思うでしょ」アンナの目は血走り、つりあがっていた。

さやかはアンナがこんなに軍国主義に反対するとは夢にも思わなかった。さやかも軍国主義には反対ではあったが、国防軍には賛成であった。世界に軍国主義国家がある限り、日本はそれらと戦うべきであり、そのためには国防軍は必要と考えていた。さらに、戦争は男だけのものではなく、優秀な女は参戦すべきと考えていた。「アンナ、そんなに、国防軍に反対しなくてもいいじゃない。仮によ、亜紀が優秀で戦闘機のパイロットになれるんだったら、その道に進ませてもいいんじゃない」さやかは亜紀が軍人になることには反対ではなかった。

アンナはさやかの頭が本当に変になったんじゃないかと心配になった。「さやか、それって、マジなの？ さやかは軍国主義者なの？ 絶対に、戦争は反対よ。多くの人死ぬのよ。さやかも、言っていたじゃない、世界各地の戦争で多くの子供が死んでいるって。戦争に反対じゃなかったの？ さやかの言っていること、さっぱりわかんないわ」アンナはさやかをにらみつけながら、問い詰めた。

さやかは自分が言ったことがアンナにはまったく通じてないことにがっかりしたが、丁寧に弁解した。「アンナ、戦争は反対よ。軍国主義者でもないわ。事実、太平洋戦争で多くの子供たちが死んだわよね。さやかが許せないのは、戦争をやって金儲けをする狂人たちなのよ。彼らは必ずお金のために戦争するのよ。だから、自分たちは自分たちで身を守らなければならないってことなのよ。我が身を守るためには国防軍は必要だって言っているのよ。わかってくれる？ アンナ」さやかは日本を守ることの必要性を訴えた。

アンナはこれ以上言ってもさやかの考えは変わらないと思い話を打ちきることにした。「さやかはさやかの考えがあるのね。でも、アンナにもアンナの考えがあるの。だから、亜紀は軍人にはさせないわ。さやかがなんと言おうと」アンナは話し終わると寢床に向かった。さやかも急いでアンナの後を追った。亜紀は二人の会話を聞いていたかのように、笑顔で寝ていた。アンナとさやかは亜紀を真ん中に置き、拓也のことなどすっかり忘れて二人は顔を見合わせると笑顔で寝入った。

生きていた！

桂学園小学校(初等部)は、男子30名、女子30名の2クラスからなり、アメリカ迎合のエリート主義による教育がなされていた。1年生から英語の授業が行われ、講師は欧米人が担当していた。公立学校で習う授業は4年生で終了し、5年生からパソコン、プログラミング、英語、数学、理科、演劇、音楽、体育の授業が主に行われる。中学からは、さらにロボット工学も学んでいく。

桂学園では小学校から高校まで一貫した理工系エリート教育を行っており、特に、英語とプログラミングに重点を置いたカリキュラムとなっている。中学校からは飛び級の留学制度があり、欧米への留学を支援している。また、桂工科大学を卒業した学生は桂コーポレーションへの就職が優遇される。優秀な成績で卒業した学生は、高額報酬のロボット兵器研究所に就職できる。

4月11日(木)、亜紀の入学式を終えた拓也、アンナ、亜紀は西区にある小さなレストラン、エルミタージュで食事をすることにした。予約していた席の南向きの窓から高校生と思われる学生たちがランニングしていた。早速、コースの前菜が運ばれ、三人は笑顔で口に野菜を運んだ。拓也は自分の今後の計画のこともあって、この機会に家族で亜紀の将来のことを話し合いたかった。拓也は自分がこの世からいついなくなってもいいように、亜紀の大学までの学費をすでに支払っていた。「亜紀は大きくなったら、何をしたいのかな？」拓也は亜紀の夢を知っておきたかった。

生ハムを小さな口に押し込んだ亜紀はゆっくりとかんで喉に流し込むと、一つ頷いてかわいい声で答えた。「亜紀は～、歌手かパイロットになりたい」亜紀は答えるとニッコリ笑顔を作った。拓也は意外な答えに少し戸惑ったが、亜紀の夢を知ったことに満足した。「そうか、でも、歌手とパイロットとは意外な組み合わせだな～、どちらもかなうといいね」拓也は亜紀の夢を素直に受け入れた。

アンナは運ばれてきた豆乳スープを一口飲むと拓也の顔をうかがいながら話しはじめた。「拓也、検診の結果は本当に問題なかったの？隠し事をしちゃ、だめだからね」アンナは時々胸が痛む、と拓也が言っていたことが気にかかっていた。拓也は一瞬心を見透かされたようで、苦笑いをしたが笑顔で答えた。「まったく、問題なかったよ。元気な精子も保存しておいたから、どんどん、子供を作ってくれよ」拓也は軽やかな声で答えるとスープを一口グイッと飲んだ。

亜紀は目の前の拓也と左横のアンナを交互に見ては、話すタイミングをうかがっていた。「お腹の赤ちゃん、男かな~、女かな~、早く生まれないかな~」亜紀は早くお姉ちゃんになりたかった。アンナは目じりを下げながら、お腹に手を当てて答えた。「赤ちゃんは、10月10日しないと生まれてこないの。11月にはお姉ちゃんになれるかな。それまで、楽しみに待っていてね」アンナは母親になれる日が待ち遠しかった。

アンナと亜紀には無限の宇宙のような未来が広がっていたが、拓也の未来はあるようで、話題にするにはあまりにも暗かった。「パパの夢は？」亜紀の質問は拓也の沈んだ気持ちを奮い立たせた。「そうだな~、亜紀の結婚式に出ることかな」拓也は思い切った嘘をついた。亜紀は結婚と聞いて純白のウェディングドレスを思い浮かべて微笑んだが、できれば、来年の事を聞きたかった。「そんな、先のことじゃなくて、赤ちゃんが生まれたら、どんなプレゼントをしてくれるの？」亜紀は家族で旅行をしたかった。

拓也は頭をかきながら答えた。「そうだよね、来年は家族4人になるんだね。よし、家族で海外旅行に行くとしよう。あ、さやかも連れて行くとするか」拓也は決してありえない未来を話した。「やった～、来年は海外旅行にいけるんだ。約束だよ、パパ」亜紀はアンナの顔を見ると頷いた。アンナも頷くと笑顔で念を押した。「パパ、約束忘れないでよ。嘘ついたら、針千本の～ます」三人はお互い顔を見合わせると、一斉に笑い声が飛び出した。

ドクターの助言もあり、拓也は体調不良を理由に、4月中旬まで休職届けを出していた。翌日、拓也は朝食を済ませ、予定の行動に出た。拓也は胸の痛みを訴え、病院に行くことにした。「アンナ、今日はドクターが病院にやってくる日なんだ。検診は問題なかったけど、胸が少し痛むから、ちょっと見てもらいに行ってくるよ。たいしたことじゃないと思うけどね」拓也はアンナに心配かけないように病院に出かけた。

甘党茶屋は11時半に暖簾を出していた。お品書きには、鯛焼きとぜんざいを載せていた。春は平原遺跡公園にやってくる観光客が多く、そこそこ、繁盛していた。アンナとさやかは仕込にもなれ、お店は軌道に乗り始めていた。アンナは拓也の体調のことはあまり気にしなくなっていたが、さやかは拓也の振る舞いの異変について話しはじめた。「拓也、心臓病かしら？」さやかは拓也の胸の痛みのことを思い出して言った。「え、心臓病？」アンナの心に不吉な予感がうごめいた。

さやかは拓也の年齢のことを考えれば、成人病になってもおかしくないと思った。キッチンのテーブルにアンナと向かい合って腰掛けていたさやかは、拓也の年頃にかかる三大成人病の一つである心臓病のことを話した。「拓也、もう、年じゃない、成人病かもね。心筋梗塞じゃなければ、いいんだけど」さやかは、最悪の状態をほのめかした。さやかの心配そうな表情を見たアンナは、不吉な胸騒ぎが大きくなった。

突然、アンナの携帯が鳴った。携帯にあてたアンナの耳に心臓を突き刺すような言葉が飛び込んできた。「拓也さんが、倒れられました。すぐに、病院にいらしてください」看護師の冷静な言葉がアンナの心をいっそう凍りつかせた。真っ青になったアンナの顔を見たさやかは動揺した表情を作った。「アンナ、どうしたの？」さやかはアンナの横に立ちアンナの肩を抱いた。

「倒れた。拓也が倒れた」アンナの顔から血の気が引いていた。「すぐに、病院に行きましょう。アンナ、しっかりするのよ」さやかはタクシーを呼ぶとアンナを抱きかかえタクシーに乗り込み病院に向かった。アンナの足は思うように動かなかった。さやかはアンナを抱きかかえ、看護師の案内で集中治療室に向かった。そのベッドには顔に布がかぶせられた拓也が横たわっていた。それを見たアンナは気を失って倒れてしまった。

拓也の死因は心筋梗塞であった。翌日になって、気を失ったアンナは冷たくなった拓也と対面した。お腹の赤ちゃんのことを考えて、涙が止まらないアンナはしばらく入院することになった。桂会長の考えで、葬儀は東京で行われることになった。拓也の死は日本だけでなく、欧米、ロシアにおいても大きな話題となった。“ガロアの再来と評され、フィールズ賞のほか、数々の賞を受賞された天才数学者、関拓也さん、4月12日（金）天国に旅立つ！”新聞では彼の記事が一面を飾り、TVでは彼の特番が放映された。ほとんどの雑誌社は彼を特集した臨時雑誌を発行した。

40代に入り、人工知能や脳機能に関する論文や、知能の未来についての論文も発表させていた。彼の論説は多岐に渡っており、政治評論や国家評論にも及んでいた。さらには、子供向けに数学と論理学をわかりやすく物語にした短編小説も発表されていた。これからの活躍が期待されていたが、人類に残した功績は計り知れないものであったとマスコミは一同に報じた。科学者だけでなく財界人や政治家たちも彼の偉業を賞賛した。

退院後、アンナは拓也の死をようやく受け入れることができるようになった。あのときから1ヶ月、やっと、アンナと亜紀の心は平静を保てるようになってきた。さやかは拓也の分身がアンナのお腹に生きていることを祝福し、未来に向かって、家族みんなで力を合わせて強く生きていくことを誓い合った。さやかにとっては拓也のいない生活はとても快適なものとなった。

そのころ、安部医科大学の地下3階で、キャサリンの指導の下、ショートボブの美女が射撃の練習をしていた。キャサリンに入力された情報によると、彼女の愛称はルーシー、本名は関拓也であった。“拓也の死”を世界中に知らせ、拓也を闇の革命家に仕立て上げる策略を指揮したのはさやかであった。いったい、さやかは何をしようとしているのだろうか？

ショートボブの美女

<http://p.booklog.jp/book/69948>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69948>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69948>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ